

失われたツバキとサツキ・ツツジコレクションの 博物館実習による再構築

杉山立志^{*†}・乗越 亮^{**}

(令和7年1月30日受付/令和7年6月27日受理)

要約: 東京農業大学厚木キャンパスは植物園として1993年に博物館相当施設に指定されている。当初は農場として機能していたので作物種などによってエリア分けが行われていたが、現在は一般的な植物園から想像する展示はなく、緑豊かな大学キャンパスである。ツバキとサツキ・ツツジは厚木農場時代に収集され、多くの品種が比較的まとまって植栽されている。ツバキは1970年にツバキ見本園が設置されたものの、1998年の厚木キャンパス設置以降は放置されキャンパスマップなどの大学情報には明記されていない。2020年からツバキの調査と整備を始め、2024年にはサツキ・ツツジの調査を始めた。その結果、学生会館に隣接する斜面約1,300平米に江戸ツバキを中心とした235本のツバキが植栽され、かつてツバキ見本園と称していたことがわかった。ツバキ園として再構築を目指し、博物館実習において個体数の確認や植栽マップを作るなど学習の場として活用し、整備を進めてきた。サツキ・ツツジは旧正門から道沿いを彩るように多数植栽されており、多くはクルメツツジであることがわかった。ツバキ、サツキ・ツツジを活用した実習における整備を通した学びと現状について報告する。また今後の活用案についても述べた。

キーワード: サツキ, 植物園, ツツジ, ツバキ, 農業実習, 博物館実習

1. はじめに

東京農業大学厚木キャンパスは1962年に厚木農場として開設された敷地の一部である。開設当初は、畜産設備などを保有する広大な面積（約28ha）であった¹⁾。その後、畜産部門の富士農場への統合などで縮小され現在は約18haとなっている。1993年にキャンパス全体を植物園とする博物館相当施設として指定され、学芸員養成のための実習が可能となった。1998年には厚木キャンパスが開設され、農学部農学科、畜産学科の学びの場となった。農学部の改組を経て、現在では4学科の学生が学んでいる。2012年に伊勢原農場が開設され、それまで厚木キャンパスが担ってきた農業実習を2013年度から伊勢原農場で行うことが可能になった^{2,3)}。その後、定期的に厚木キャンパスの植栽管理を伊勢原農場へ異動した職員が行っていたが、実習としての使用がなくなったこともあり、現在は講義棟周辺的环境整備を優先し、キャンパス全体の植栽管理は十分に行われていない。かつて設置されたツバキ見本園も放置され、情報が失われた。

2. 資料と調査方法

2.1 文献調査

主な資料は、植物園講義室内に保管されていたものや、伊勢原農場資料室に保管されているものを用いた。また、電子ファイルで保管されていた資料も参考にした。その他、東京農業大学百年史、植物園ニュース等の刊行物については、農学部図書館蔵書もしくは植物園講義室保管物を用い、参考文献として明記した。

2.2 ツバキおよびサツキ・ツツジ実地調査

ツバキ園、キャンパス全体の実地調査は2020年10月から開始した。毎年10月から12月に行う博物館実習では、主にツバキの位置を調査し、ラベルの有無などを確認した。3月から4月に行う博物館実習でも同様に位置の調査などを行うとともに、開花している品種については花の特徴を確認し、品種同定の基礎情報を収集した。

サツキ・ツツジは久留米ツツジのリストを発見した2023年7月から調査を行った。サツキ・ツツジは1列に

^{*} 東京農業大学農学部植物園

^{**} 東京農業大学農学部教養部門

[†] Corresponding author (E-mail: rs207428@nodai.ac.jp)

並んでおり、区別が容易であったため、実習での調査は行わなかった。

3. 結果

3.1 ツバキ園（旧・ツバキ見本園）

ツバキは学内の資料として最も情報量が多かった。また日本に自生する樹木であるために無管理でも生存している品種が多く、個体認識が可能な状態にあった。しかしながら、ラベルの欠落などがあり、品種不明のものが多かった。現在のツバキは用賀農場（世田谷区上用賀4丁目）にあったツバキ見本園から、福田明人先生が挿し木を1958～1960年の間に行った株に由来する⁴⁾。用賀農場のツバキ見本園の広さは約100坪で、115品種が植生されていた。これらのツバキは、安達流生け花の家元であった安達潮花氏のコレクションの一部で、造園会社の東京植木が管理していたものである。安達氏は江戸ツバキを中心として日本各地のツバキを収集し、600品種以上を所有していたといわれる。この安達家のツバキのうち用賀農場で管理されていた115品種が現在のツバキ園の基礎となった。

1960年に厚木農場の用地取得後から、用賀農場の樹木等の移植を開始した。ツバキは鉢植えで管理し、定期的に品種を増やし、洋種ツバキ88品種も収集した。1970年には保有品種数は233品種となり、国内でも有数のツバキコレクションとなった。鉢で管理していたものの中から生育の良いものを1970年に、現在のツバキ園となる場所に植栽された（図1⁴⁾）。この時の植栽本数を示す資料は見つかっていない。福田先生の報告によると、当時としては珍しいツバキもあったので、穂木を盗む人がいたため、あえてラベルを外してしまったとある⁴⁾。そのため、現在も品種不明の個体が多くある。2002年のツバ

キ見本園マップによると、異なる品種141本のツバキが植栽されていた。このマップとは独立して1981年に行われた移植の記録には、品種不明個体を含めて、33本のツバキが記載されていた。

これらマップをもとに2020年より博物館実習により、調査と整備を進めた。当初の調査で明らかになった株数は237本であり、2002年のマップとは大きく異なることがわかった。異なる年に作成されたツバキリストや鉢植えリストなどから1970年以降も鉢植えで大きくなった個体をツバキ見本園内に植栽し続けたと考えられる。

これまでの調査の結果、2020年以降に加えた2品種（玉之浦、利島産ヤブツバキ）と合わせて、名称がわかったものは126品種であった（表1）。ただし、ラベルはあるものの開花せず品種確定に至っていないものも含む。2025年1月時点でツバキ園に現存する株数は235株であったので、109株は品種不明となる。名称のわかった品種をもとに不明株を確認すると、同一品種と思われる株が複数見つかった。235株はすべて異なる品種ではなく、一部重複しているようだ。

旧・厚木農場造園部が整理した「東京農業大学農場造園四十八年史」によると、その後もツバキ園内や園外の農場敷地内へツバキの植栽が行われていた。そこで、ツバキ園だけではなく、厚木キャンパス全体のツバキの調査を進めた。ツバキ園外の株には品種ラベルは存在しなかった。洋種ツバキと思われるS. Peter Nyce, Nina Avery, Ville de Nantesを第二講義棟の周囲で見つけた。四十八年史には1968年に埼玉県植物振興センターの中村恒雄場長より200本の洋種ツバキの寄贈があったとの記載がある。第二講義棟周囲のツバキは、この200本から由来すると考えられる。また上述の洋種88品種もこれらが由来と考えられる。寄贈いただいた埼玉県植物振興セ

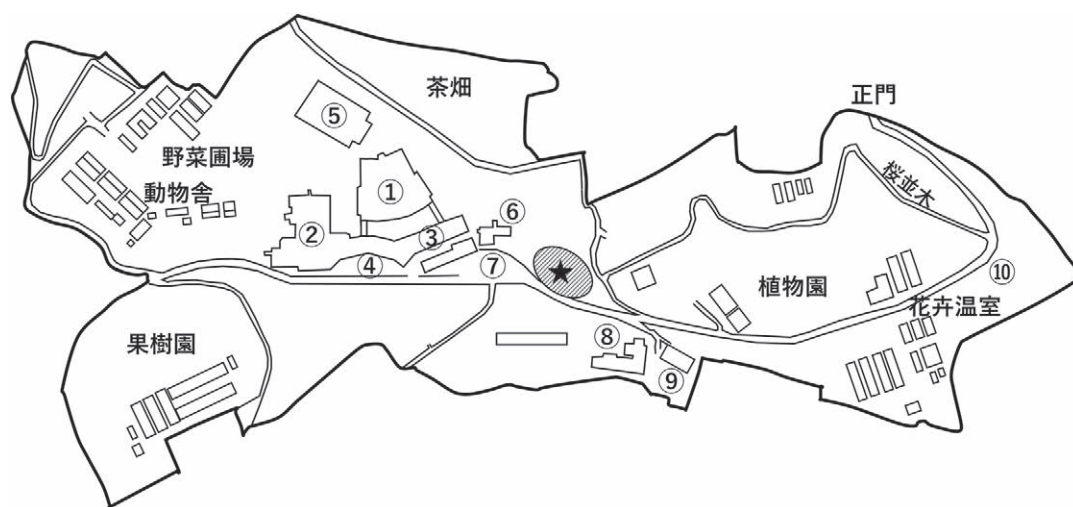


図1 2003年頃の厚木キャンパス配置とツバキ見本園（現・ツバキ園）の設置場所

★ツバキ見本園、①講義棟、②学科研究棟、③本部棟、④レストラン、⑤体育館、⑥農の博物館、⑦バス停留所、⑧研修センター、⑨食品加工センター、⑩2024年にクルメツツジが植栽されている場所。（参考文献4より著者改変）

表1 品種名の明らかとなったツバキ (130 品種)

明石潟	京錦	白太神楽	初雁
秋の山	京牡丹	白妙蓮寺	花車
曙	玉牡丹	白佗助	花橘
東紋	錦魚椿	数寄屋	花富貴
貴椿	銀世界	西王母	花見車
蜚小舟	孔雀	草紙洗	光源氏
天の川	熊坂	染川	日暮し
天が下	黒椿	太神楽	斑入乙女
荒獅子	黒佗助	太陽 (中部)	斑入限り
淡路島	見鷺	宝合	覆輪一休
空蟬	源氏車	多福弁天	紅唐子
笑顔	紅乙女	玉兎	紅麒麟
大唐子	紅牡丹	玉兎一京都	紅太神楽
大白玉	光明	玉垂	紅千鳥
大虹	御所車	玉之浦	紅佗助
沖の石	胡蝶佗助	太郎庵	星牡丹
沖の浪	小紅葉	太郎冠者	不如婦
乙女	崑崙黒	千年菊	三浦乙女
阿蘭陀紅	盃葉	中将白	紫椿
顔好鳥	残雪	月の都	名月
角葉白玉	日月	天人椿	藻汐
神楽獅子	絞笑顔	天人松島	紅葉狩
風折	絞乙女	錫の羽重	ヤブツバキ
加茂本阿弥	絞唐子	錦重	大和紅
唐糸	絞瑞子	抜筆	雪見車
狩衣	聚楽	後瀬山	淀の朝日
迦陵頻	寿老庵	梅香	羅撰染
灌花紋	春曙紅	白獅子	蓮上の玉
寒椿	昭和佗助	白拍子	
菊冬至	蜀紅	白鵬	(洋種ツバキ)
黄覆輪紅唐子	白玉	白牡丹	S Peter Nyce
君が代	白玉絞	羽衣	Nina Avery
京唐子	白唐子	蓮見白	Ville de Nantes

注) 五十音順 (読みは主に参考文献 5, 6 による)。130 種には、ヤブツバキも含めた。その他、変種としてヤクシマツバキ (リングツバキ) がある。

ンターは、現在「花と緑の振興センター」に改組されている。センターの Web サイトには保有する洋種ツバキの情報があり、開花時期と花形態を照合して、上記の 3 品種を同定できた (図 2)。これらの品種は国内で保有する施設も少なく、貴重な品種であるとわかった。その他、ツバキ園内には存在しない熊谷と思われる品種もあった。また現在の正門近傍の斜面には、ツバキ園の株をバックアップとして植えたと言われるツバキがある。急斜面であり、他の自然木、ササなども生い茂り、正確な本数は調査できていないが約 130 株ある。開花時に品種を確認すると、同一の品種が多く植えられており、バックアップではなく、余った苗を植えたと考えられる。確認できた主な品種は、崑崙黒、大虹、光源氏、錦魚椿であった。キャンパス内の調査結果から、ツバキ園内の 126 品種に洋種 3 品種、錦魚椿を含めて、キャンパス全体では 130 品種の名称がわかった (表 1)。その他、ツバキ園内にはヤブツバキの変種であるヤクシマツバキ (別名：リングツバキ) もあることがわかった。これらの品種は一重から千重といった花卉の数の違いや、絞りなどの斑の入り



図 2 厚木キャンパスで栽培されている貴重な洋種品種
A: S. Peter Nyce, B: Ville de Nantes, C: Nina Avery

方の違い、雄蕊が花卉化する唐子咲き、白色から黒椿といわれる濃い紅色までの色の種類など、ツバキ品種に見られるほとんどの性質を含むので花形態等の研究教育に活用可能であることもわかった。2025 年 1 月までの博物館実習などでの調査を整理すると、ツバキ園外でキャンパス内に点在するツバキは、252 株であった。ツバキ園と合わせて、487 株のツバキを確認できた。調査では、大きな株の近傍にあった実生と思われる株は数に入っていない。それらを含めるとキャンパス全体にはツバキが約 500 株あると考えられる。

ツバキ園内だけでも品種不明な株が半数を占め、キャンパスに点在するツバキは名称がほとんど不明のため、今後同定が必要である。由来となった安達家のツバキは全コレクションが、横浜市のこどもの国に移植されている。これらは栽培環境も似ていることから開花時期が同じになるため、花形態に加えて開花時期で品種を同定することが可能になる。一方、上述の正門横の斜面に植栽されたツバキも含めて、学内のツバキは放置されていた期間が長く、栽培環境も悪化しているため、開花しない個体が増えている。今後、栽培環境の悪い個体から挿し木をして栽培条件を改善し開花させることで品種同定をするなどの工夫も必要である。

なおツバキを収集だけでなく、増殖を行っていたため、本学から学外に譲渡や販売したツバキもあることがわかった。椿ラインと呼ばれる神奈川県道 75 号湯河原箱根仙石原線の植栽の一部は厚木農場から提供されたものである。京都の二条城の庭園整備においても本学からツバキ苗が提供された。現在も二条城にツバキは残っているが、本学だけではなく、他の植物園等から入手したものがあり、どの株が本学由来かは不明となっている (注：2024 年 9 月 学生による調査)。

今後も不明品種の調査は必要であるが、大学のキャンパス内にツバキ園があるのは珍しい。新潟大学には、五十嵐キャンパス (新潟県新潟市) に、「ゆきつばき園」があるが、植栽数は本学よりやや少なく 310 本である。大阪公立大学附属植物園 (大阪府交野市) には約 250 種 330 本のツバキがあり、本報告で明らかになった本学の品種数よりも多い。しかし、理学部と農学部のある中百舌鳥キャンパス (大阪府堺市) からは 29 km ほど離れてい

表2 品種名の明らかとなったサツキ・ツツジ (15 品種)

薄緑り	高砂	初音
老の目覚	田子の浦	日の出の鷹
神楽	玉手箱	舞孔雀
殿	難波渦	水の山吹
大麒麟	羽衣	双絵久保

注) 五十音順 (読みは主に久留米市世界つつじセンターの Web サイト⁷⁾と参考文献 8 による)

る。それに対して本学厚木キャンパスでは講義棟や学生会館に隣接してツバキ園があり、正門からの通路の横にも 100 本以上のツバキが植栽されている。本学厚木キャンパスは、ツバキを教育研究へ用いるのに恵まれた環境にあるといえる。新潟大学、大阪公立大学のツバキ園以外の植栽本数は不明であるが、追加で 200 本を超えることはないのであれば、厚木キャンパスのツバキ植栽数は約 500 本なので、大学では最も多いことになる。なお教育機関として最も多くのツバキを保有するのは東京都立大島高等学校で、約 380 種類、1000 本以上のツバキがあり、国際優秀つばき園に認定されている。

3.2 サツキ・ツツジ

サツキについては 1969 年 12 月 10 日作成の台帳を転記した記録により、サツキ 51 品種を地植えしていたことがわかった。地植え株と同じ品種の保存株を含めた鉢植えでは 87 品種がリストに記載されていた。

1994 年 5 月 27 日に作成された「クルメツツジ品種一覧」によると、品種名不明の 4 株を除いて名称が明らかな 120 株のクルメツツジが存在したことがわかる。同じ資料にクルメツツジの植栽マップがある。南 1 号、2 号圃場と呼ばれた敷地 (図 1 ⑩) の境にはこれらの 124 株が植栽されていた。

現在の位置を確認したところ、その半数以上が失われていた。現存するのは、32 株であることがわかった。クルメツツジの植栽マップの品種名と久留米市世界つつじセンターの Web サイト⁷⁾にあるツツジ情報と照らし合わせて花形態やその特徴を確認した。その結果、15 株の品種を同定できた (表 2)。今後も、開花時に他のツツジ図鑑などに見比べることで残りの品種の同定を進める。

現存するクルメツツジの植栽位置は、マップと一部異なる部分があった。マップには 1 株しか存在しない場所に 10 株あることがわかった。上述の 124 株の半数以上はその後の敷地整理によって、完全に失われていることから、一部のツツジを保存するために他の場所に植替えたものと推定される。10 株中 1 株はマップにあったものと花形態から品種名を明らかにできた。その他の品種は、移植されたと推定して品種同定を進める。ツバキと同様に、キャンパス全体の調査を進めたところ、第二講義棟

周囲にクルメツツジと思われるものが 2 株存在していた。その他、サツキとツツジも旧正門 (図 1 の正門) から植物園温室付近と、桜並木付近に多数植えられていることがわかった。これらの中にクルメツツジを移植したものが含まれる可能性がある。しかし植栽が密であり、個体識別が難しい。今後、剪定して個体を分け、開花時期や花形態からリストと照らし合わせ品種同定を進めていく。

3.3 博物館実習での経過

2020 年度にツバキ園の調査を実習で開始したときには、2002 年に作成された植栽マップを参考にした。2020 年度の生物資源開発学科 1 年生の農業実習において 141 株の確認を行ったところ、141 株ではなく、200 株以上存在することがわかった。さらに、ツバキ見本園はマップの領域よりも広いことも明らかになった。植栽マップに記載されている品種の間に、記載されていないツバキ個体が散在し、植栽マップから目的の品種を探すことも困難であることもわかった。

2020 から 2021 年度には新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の流行により学外での博物館実習の多くが中止となった。2020 年度の後期から学術情報課程の受講生で博物館実習を希望する学生の受け入れを開始した。2021 年度には 33 名を厚木キャンパスで受け入れることになった。3~7 名からなる 6 グループに分けて、異なる日程で実習を行った。実習では長期間放置されてササなどが繁殖していたツバキ園内の除草とタグ記載の番号の確認、新しいマップの整備を進めた。その結果、2021 年時点で 237 株のツバキがあることがわかった。2002 年の品種リストには 138 品種あることから、重複した株や、品種リストに記載のない品種が植栽されている可能性があった。調査において、一部は番号も欠損し、品種名ラベルが無いものも多いことがわかった。上述のツバキ見本園を整備した福田先生の報告によると、ツバキの盗難を防ぐためにラベルを外したようだ⁴⁾。当時は貴重な品種もあったのでやむを得ない措置であった。おそらく別途、個体と照合できる品種リストがあったと思われるが、現存せず、結果的に品種不明のものを発生させることになった。

2021 年以降は、秋の実習では、ツルの除草などの植物管理に加えて、ツバキは個体の位置を確定するマップを作ることを優先した。その後、237 株を 1 枚のマップにまとめることは困難であるとの議論があり、区画を分けてその中で位置を明確にする方向に変更した。エリアを決めることも博物館実習として行い、その前段階として、散策路をどのようにしたら歩きやすいのかも課題として進めた。最終的に A から J の 10 つのエリアに分けた (図 3)。2025 年 1 月の実習までに 2 株が失われて個体数

は235となった。これらを各エリアに12から35株のツバキを含むように分けることができた(図4に例としてBエリアを示す)。広いエリアには2ヶ所にエリア内マップを設置することとした。各エリアのマップをどこに設置するのが良いなども議論して決めた。エリアを分けることで、今後、品種名が明確なものが多いエリアや、観賞価値の高い品種のあるエリアなど、特徴のあるエリアを優先して整備することも可能になった。

実習課題として、ツバキの紹介プレートをA4サイズで自由に作ることを課した。当初は好きな品種を選べたが、品種名の確定ができたところから、不足している品種を指定して充実を図った。その結果、個性豊かなプレートが出来上がった(図5)。同様の取り組みとしては、竹島水族館では、学芸員の作成した「魚歴史」という説明プレートがある⁹⁾。一般的な植物園では、植物名のプレートは統一されたデザインで、耐久性のあるプラスチックで作られている。デザインを統一するのが良いと思われるが、一つとして同じものがないプレートを展示しても全く問題がなく、個性的な展示となった。作成したプレートはカラー印刷して、ラミネートして用いた。固

定は自然環境へ配慮して、シュロ縄を用いた。ラミネートも、シュロ縄も経年劣化が早いので、毎年の博物館実習でその損傷を確認して、紛失する前に更新するようにした。

一般的な博物館実習は、資料の保管、展示に関する内容が多い。それは完成された博物館を維持することが目的のためである。したがって、通常の実習では博物館施設の設計を考えたり、遊歩道の配置を考えたりする機会はない。一方、本学植物園では、情報が失われたことを契機に、「博物館を作る」実習を行っている。すべての博物館は、目的を持って設置され、その目的を達成するために設計している。その際に、来場者に対してどのようにしたらわかり易いのか、見やすいのかなど来場者視点が求められる。そういったことを学ぶ機会として、ツバキ園を用い、通路の配置の提案もしてもらっている。このことは、実習日誌の振り返りなどを読むと、「来場者の

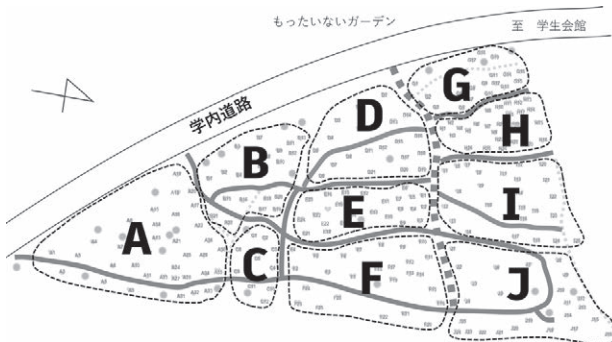


図3 ツバキ園の区画分け
濃い灰色の線は散策路を示す。

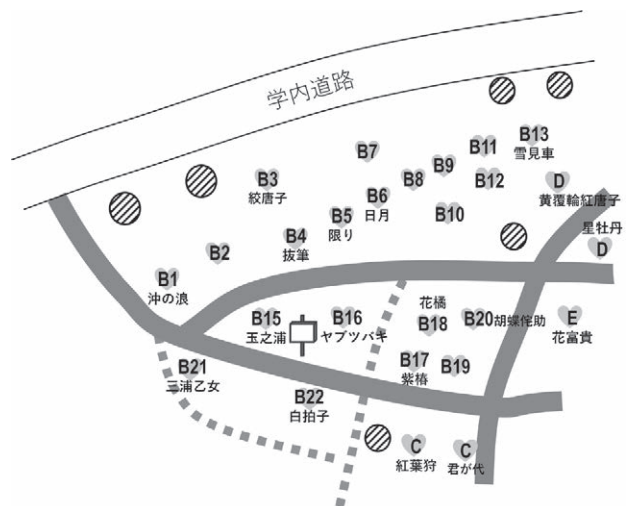


図4 エリアBのマップ例
B1からB22はツバキの株の位置と番号を示す。斜線丸はツバキ以外の樹木を示す。看板マークは案内板設置候補の場所を示す。



図5 個性豊かな品種紹介プレートの例
代表的な構成例を示した。手描きで作る、縦型に作るなど個性豊かなプレートとなった。

視点を考えることが勉強になった」と書く実習生も多く、一定の教育効果があるといえよう。常に未完成の植物園として、キャンパス内の様々な場所を「博物館を作る」という視点で博物館実習に活用することは特徴のある学芸員養成教育といえる。

ツバキの開花時期は2月から3月に集中する。大学等の教育研究の年間スケジュールでは卒業や講義のない春季休暇の時期に重なり、卒業研究や通常の実習日程とも一致しないため、ツバキの花を学生の教育に活用できなかった。しかし、通常の講義期間には開催が難しい博物館実習は、講義のない冬休みや春休みの期間を活用して開花調査や花形態による品種同定、開花状態の写真整備などが可能となる。ツバキ園整備、その活用は時期的にも博物館実習に非常に適している。

3.4 農業実習での活用

後期に行われる農業実習において、生物資源開発学科の1年生を対象としてツバキの挿し木を2021年度から行った。遺伝資源学研究室担当の実習として1年生全員を2グループに分け、2日間行った。実習時期が11月から12月であり、やや挿し木に適していないが、実習として数多く行うことから各品種で必要十分な個体数が得られるので、ツバキ園のバックアップとしての鉢植えづくりに貢献している。当初は、挿し木後の管理が難しく枯死する数も多かったが、春に植替えを行い生存率が高くなった。2024年度には、挿し床から5号ポリポットに寄せ植えした植替え株から、個別の鉢植えへの植替えも実習で行った。挿し木から植替えまでを実習として学べ仕組みを構築することができた。

サツキ・ツツジは旧正門付近に植生されており、日常的に来訪者も少なく、その花を愛でる機会が少ない。開花時期である5月末には厚木キャンパスでキャンパスツアーが開催される。そこで、異なる品種を挿し木によって増殖し、開花時期に講義棟周辺に設置することを計画した。サツキ・ツツジの挿し木試験を行ったところ、1年枝でなく、2年枝以上での発根率が高いことがわかった。2024年度後期の農業実習において、生物資源開発学科1年生にツバキの挿し木と同時に、クルメツツジの挿し木を行った。これらは今後の生存率を確認して、次年度以降の実施を検討する。ツバキと異なり、挿し木翌年にもサツキ・ツツジは開花することから学生が挿し木したものを春にポリポットに植替えし、キャンパスツアーの希望者に配布することも検討している。

4. おわりに

厚木キャンパス内の植生整備は不十分で、雑然としている。その中でも情報と個体が明確なツバキとサツキ・

ツツジの現状調査と整備を行った。ツバキはツバキ園とキャンパス全体のツバキ植栽を調査した。サツキ・ツツジは学内通路に面した植栽を調査した。ツバキ園の実地調査は農業実習、博物館実習に参加する学生の教育の場としても活用した。ツバキ園の個体のバックアップを作製するための挿し木や植替えを農業実習で学ぶ機会を構築できた。サツキ・ツツジについても農業実習での挿し木を開始し、今後の管理については博物館実習で行うなどを検討し、植栽管理とそのバックアップ整備を学べる機会へ発展できるだろう。これまでの実習により、ツバキ園のエリア分けが可能となった。エリアごとに整備を進めることで一部公開可能なツバキ園を再構築できた。

現在、厚木キャンパスではナラ枯れも目立つようになった。倒壊の危険性から2024年の6月から8月にかけて伐採を行った。その過程で、ツバキ園も10株ほどが損傷を受け、1品種は完全に失われた。品種を購入すれば補うことができるが、樹齢60年を超えていたので、同様のツバキ個体をこれから作るには60年の年数を必要とする。このような事態を避けるためにも、キャンパスの植生を調査し、情報を共有することを早急に進めなければならない。情報がなければ、価値もわからず、保全・活用の方法も見出されない。今回調査したツバキ、サツキ・ツツジ以外にもアジサイやウメは多数の品種が植栽されているが、管理不足で枯死しているものも増えてきた。これらの調査や管理も博物館実習や農業実習での学びの機会として活用できるように検討する。

導入情報や品種情報の欠如は博物館資料管理として本来はあってはならない事態である。ツバキについては、鉢植えで多くの品種があったことも資料からわかったが、それらの鉢植えは存在せず、管理不足で枯死し廃棄されたのであろう。しかし枯死して廃棄した記録もないため、資料の紛失ともいえる。リストされていた品種が全て存在していれば国内でも有数のツバキコレクションとなっていた。キャンパス内に植栽されたツバキやサツキ・ツツジは、開花時期に品種を同定することが可能なことから、一部の情報を再構築することができた。この事によって、情報欠如の問題を学びつつ、植物園を作るという視点の実習からバックアップ体制作りまでを学べる機会として、学芸員教育に活用することでプラス面へ転換できた。ツバキ園は傾斜地で、歩きにくい。今後は、造園科学科の実習とも協力して歩きやすい通路整備をすすめ、実習で提案されたエリアを徐々に公開できる体制を構築する。

参考文献

- 1) 東京農業大学創立百周年記念事業実行委員会第二部会編 (1993) 東京農業大学百年史。本編。東京農業大学、東京。

- 2) 東京農業大学創立百二十五周年史制作部会編（2016） 東京農業大学百二十五年史. 東京農業大学, 東京.
- 3) 東京農業大学学術情報課程編（2023） 東京農業大学学術情報課程 1982 年～2022 年における 40 年の歩み. 東京農業大学学術情報課程, 東京.
- 4) 福田明人（2003） 東京農業大学厚木キャンパスのツバキ見本園誕生について. 東京農大植物園ニュース. 34: 2-5.
- 5) 津山尚（1968） 日本の椿. 武田科学振興財団, 大阪.
- 6) 津山尚, 二口善雄（1975） 日本椿集. 改訂増補版. 平凡社, 東京.
- 7) 久留米市世界つつじセンター 〈<https://www.sekai-tsutsuji-center/>〉（最終アクセス 2025/01/06）
- 8) 久留米つつじ誌編集専門委員会 編（1989） 久留米のつつじ：久留米市制 100 周年記念. 葦書房, 福岡.
- 9) 小林龍二（2018） へんなおさかな 竹島水族館の「魚歴書」. あさ出版, 東京.

Reorganization of Camellia and Azalea Collections Through Museum Practice

By

Ryuji SUGIYAMA^{*†}, Ryo NORIKOSHI^{**}

(Received January 30, 2025/Accepted June 27, 2025)

Summary : In 1993, the Atsugi campus of the Tokyo University of Agriculture was designated as a museum-equivalent botanical garden facility. Because the campus functioned initially as a farm, the areas were divided according to crop species. However, displays expected of a typical botanical garden currently do not exist at the facility, and it is instead a university campus with rich greenery. Camellias and azaleas were collected during the Atsugi farm period, and many varieties were planted in relatively large clusters. Although a camellia garden was established in 1970, it has been left unattended since the establishment of the Atsugi campus in 1998 and is not clearly indicated on campus maps or other university information sources. A survey revealed that 236 camellias, mainly Edo varieties, were planted on a slope of approximately 1,300 square meters adjacent to the student hall, which used to be named the Camellia Sample Garden. To reconstruct the area as a camellia garden, it has been used and maintained as a learning opportunity for museum training, which includes checking the number of individuals and creating a planting map. Several azaleas, many of which are Kurume varieties, were planted along the road stretching from the previous main gate. In this paper, the lessons learned from the practical training and the status of the maintenance work using camellias and azaleas are reported. Additionally, the proposed future use of the campus is stated.

Keywords : Agricultural practice, Azalea, Botanical garden, Camellia, Museum practice

^{*}Botanical Garden, Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture. Atsugi-shi, Kanagawa 243-0034, Japan

^{**}Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture. Atsugi-shi, Kanagawa 243-0034, Japan

[†]Corresponding author (E-mail : rs207428@nodai.ac.jp)